

第1回グローバル教育推進委員会資料

高知南版グローバル教育プログラム（英語教育）

平成28年7月4日
高知県教育センター

I 研究概要

高知南中学校・高等学校では、グローバル人材の育成を目指し、研究主題を中学校英語科では、主体的に考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒を育成する、高等学校英語科では、自国の文化を理解し、国際的な視点で物事を考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒を育成するとし、「6年間のシラバス」の実践及び授業改善を中心に据えた教科マネジメントに取り組む。平成27年度は、「6年間のシラバス」に研究主題の視点を入れ、言語活動を通じて英語力の向上・研究主題の実現に取り組んだ。本年度は、系統性のある指導を行うとともに、その評価について研究する。

II 推進体制

高知南中学校・高等学校をグローバル教育の研究協力校とし、「英語教育プログラム」の開発と「探究型学習プログラム」の開発を行う。

高知県教育センターの体制			高知南中・高等学校の体制			
グローバル教育の担当 7名			英語教育推進チーム 9名		教科会(英語)	
			チーム長：中学校教頭			
学校支援部長	1名		高等学校	国際教育部長、国際科長 情報教育部長	英語科長	高等学校教科会 11名
チーフ	1名		中学校	—	英語科担当教員 4名	中学校教科会 4名
英語担当	5名	(常駐1名)				
探究担当		(常駐1名)				

III 平成27年度の課題

- 各学年終了時の学習到達目標の具体化と共通理解
 - ・「6年間のシラバス」を身に付けるべき力を育成するものになっているかという点から見直し、それに沿って指導した。しかし、英語科として、学年が上がれば、どのような英語力・態度を目標とするのかを共通理解できいなかったため、系統性のある指導と評価という点で不十分であった。
 - ・『CAN-DO リスト』の形で学習到達目標（以下、「CAN-DO リスト」という）を昨年度途中で作成したため、スパイラルな指導をすることができなかった。
- 生徒との目標の共有
 - ・生徒に単元や1時間の目標を提示し共有することはできたが、パフォーマンステストの内容や評価を事前に伝え、計画的・継続的に指導していくことに課題があった。このことから、テストの妥当性についても研究する必要がある。

IV 平成28年度の取組

- 本年度の到達目標**
- ① 「CAN-DO リスト」と「6年間のシラバス」を関連付け、系統的な指導をする。
 - ② 1時間1時間の授業で生徒が「英語で～ができる」ようになり、生徒がそれを実感できるよう、生徒との目標の共有、生徒が自身の現状を可視化できる手立てを工夫する。
 - ③ 「知識・技能」を活用し、英語で表現する力・理解する力を測るテストを実施する。

(1) 4月から8月の主な取組及び当面の予定【参考別紙1・2】

月	推進体制	回数	主な取組
4 5 6	グローバル教育校内委員会	2回	・今年度の目標・年間計画について ・進捗状況の報告
	英語教育推進チーム会	2回	・研究計画、研究内容、成果物について ・進捗状況の把握
	教科会	14回	・授業改善の視点について ・本年度の研究の見通し ・評価観点・評価規準について ・CAN-DO リストの活用について ・CAN-DO リストに照らし合わせた指導内容と生徒の現状について ・筆記テストについて（中間テスト）
	教科研修（中学校）	1回	5/26 授業研究（中3 話すことの指導）
	調査		5/26～6/10 第1回英語学習への意識・実態把握調査（対象：中学校・高等学校全生徒）

7 ~ 8	夏期休業中研修	2回	<p>■教科内研修 7/29</p> <p>講話： 「自律した学習者を育てる英語の授業～CAN-DO リストを踏まえた授業～」</p> <p>講師： 明治大学 尾関 直子先生</p> <p>■教科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ CAN-DO リストと関連を図った2学期からの指導内容とその評価 ・ 第1回英語学習への意識・実態把握調査の分析
-------------	---------	----	---

(2) 具体的事例

① 『CAN-DO リスト』の活用【参考別紙3・4・5】

<実践>

- ・ 「28年度版6年間のシラバス」の中学校3年間は、「CAN-DO リスト」と関連付けて、単元目標と言語活動を設定した。
- ・ 帯活動や単元目標の達成につながる言語活動として、自分の考えや気持ちを伝え合う活動を継続して行っている。また、28年度は、話したことを書く、読んだことを伝える等技能を統合した活動を行っている。
- ・ 教科会で1学期中間テストまでの指導内容とCAN-DO リストを基にした達成状況について確認した。

<今後の取組>

- ・ 英語科として各学年終了時に「英語で～ができる」という学習到達目標を具体的にし、それに関連する単元の言語活動と評価規準について話し合い、中学校3年間の系統的な指導を目指す。
- ・ CAN-DO リストに対して、どの程度身に付いているのかを一定のスパンで把握し、指導する。
- ・ 単元の指導に、研究主題の視点を入れ、目指す生徒像を育成する。27年度に引き続き、授業実践交流会を行う。

② 評価の改善【参考別紙6】

<実践>

- ・ 指導案検討会において、スピーチのパフォーマンステストの評価観点について協議をし、共通理解を図った。

<今後の取組>

- ・ 夏期休業中の教科内研修を通して、2学期以降の指導内容とその評価について協議し、実践につなげる。
- ・ パフォーマンステストのワークシートの作成（授業者用・生徒用）を通じて、3年間を通じて系統的な指導ができるようにする。また、生徒の自己評価や相互評価を取り入れ、生徒が自己の学びを客観視し、その後の学習につなげる。
- ・ 授業研究を行った単元では、その単元のパフォーマンステスト・筆記テストが、単元で身に付けるべき力を測るものになっているか研究する。（高知県学習定着状況調査、「英語教育改善のための英語力調査」（文部科学省）等を参考にする。）

③ 学習意欲を高める指導の工夫

<実践>

- ・ 授業では単元や1時間の目標の提示、言語活動、ゴールに対する振り返りを学習過程に位置付け、主体的・協働的な学びを工夫している。

<今後の取組>

- ・ 英語学習への意識・実態把握調査の分析をし、学習意欲、授業内容の理解度の向上のための手立て、家庭学習の内容について協議する。指標とする調査項目を挙げ、目標値を設定する。
- ・ ICT 機器（タブレット端末等）を活用する時には、身に付けるべき力を明確にする。

VI 協議事項

高知南中学校・高等学校の英語科では、授業改善を通して研究主題の実現に取り組み、昨年度2回の英語学習への意識・実態把握調査を実施した。その結果、ほとんどの項目で数値が上昇していたが、学年で見ると、上学年の方が低くなる傾向にあることが分かった。

本年度は、生徒の実態を踏まえて、単元や1時間の目標設定をした上で、生徒と目標を共有し、自己評価や相互評価を入れて授業を行うこととしている。評価について、授業者が心得ておくべきことについてご協議いただきたい。